研究

佐伯市戦後五十年史（二五）
―昭和四十年代の社会・文化・スポーツ―

矢野彌生
（会員　佐伯市中山区）

〈前号〉
二四　昭和四十年代の社会・文化・スポーツ
（一）労働問題

二五　昭和四十年代の社会・文化・スポーツ（続）
（二）住宅団地の造成

昭和四十年から五十年に　〈核家族化が進行〉　佐伯**かけて住宅団地の建設進む**　市の世帯数と人口の推移をみると、第1表のとおりである。すなわち、高度成長期は、市の世帯数は漸次増加を続けており、それに対し総人口は減少していることが分かる。これは核家族化の傾向が著しいことを示している。

第1表　世帯数と人口の推移

（単位：世帯・人）

年度	世帯数	人　口	1世帯当たり人数
昭30	10,807	51,226	4.74
35	11,851	51,369	4.33
40	13,173	51,145	3.88
45	14,264	50,698	3.55
50	15,649	52,863	3.38

（『佐伯市現代二十年のあゆみ（1）』による）

第2表　公営住宅建築状況

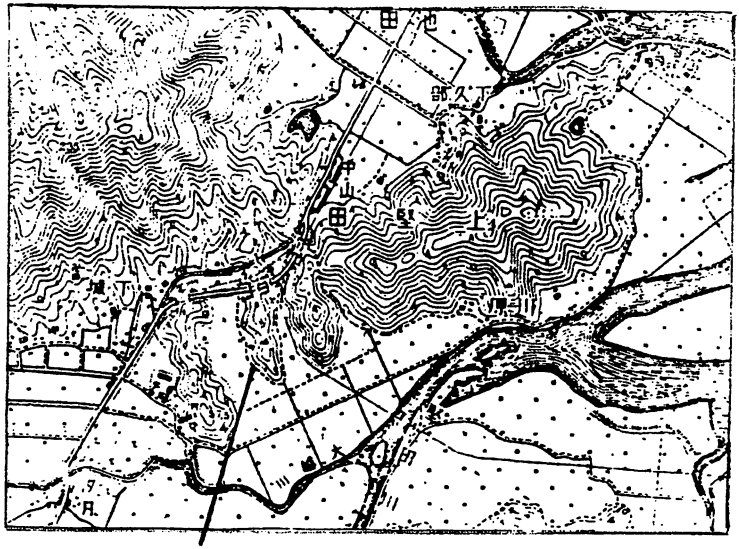
年度	建築戸数	年度	建築戸数
	戸		戸
昭38	20	昭45	24
39	22	46	24
40	30	47	26
41	24	48	38
42	26	49	24
43	24	50	32
44	30	51	16

世帯数の著しい増加は佐伯市の住宅不足をきたし、そのため、これを解消するため、公営住宅を建設してきた（第2表参照）。たとえば**城西団地**では昭和四十三年（一九六八）に市営住宅が七戸建設されて以来、同四十七年までに計百三十九戸が建設されている。

〈住宅団地が漸次建設され、県南の最大の団地、中山団地生まれる〉　佐伯市では、多くの市営住宅が建設された。さらに日本勤労者住宅協会（半官半民の準公的組織）が、大分県労働者住宅生活協同組合をとおして、労働金庫に委託して造成したのが、上堅田地区の匠南・中山団地である。

匠南団地は昭和四十年に着工し、昭和四十五年に完成しており、市内の上・下久部地区に一万四千五〇〇坪を埋立て、これに百三十戸が建設された。

また、昭和四十六年三月には、当時住宅団地としては県南最大といわれた**中山団地**が「大字長谷字北中山」に建設が始まった。建設場所は第1図に示すように、山林・田畑であったところを大分県労働者住宅協が地域住民の協力を得て総面積五万一千平方メートルの団地買収及び宅地造成工事を行ない、静閑なる住宅地として昭和四十七



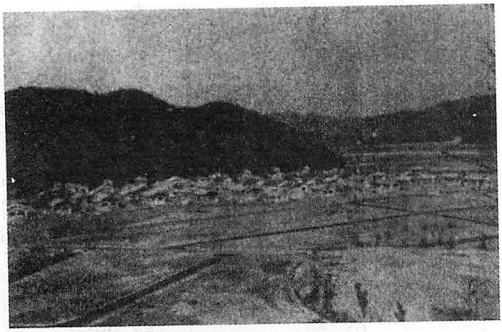
このダンゴ山（通称）を崩し中山団地を造成（右の山を崩し佐伯南中学を設置）

第1図　中山区造成前の地図（中山区記念誌による）（2）

年（一九七二）四月より百五十一戸を分譲している。

さらに、第二期計画として面積二万平方メートルを造成し、昭和五十九年（一九八四）四月より五十八戸を分譲開始し、総面積七万一千平方メートル、総戸数二百九戸のすばらしい環境と優れた立地条件（水害などに強いなど）の中山団地が完成した。[3]

昭和四十七年に中山団地の分譲が開始された当時、初代区長川野三重氏は追想記で次のように伝えている。



建設の進む中山団地（昭和47年ごろ）

昭和四十七年八月十二日に入居。この時期、まだ住宅の水道は使用できず、戸外の工事用水道を使用して食事の準備をし、風呂は親戚や知人宅にお世話になった。盆を過ぎると入居者が増え、「中山区入口付近から中山団地を見ると、まるで砂漠のはるか向こうに三十一戸の住宅が一握りの集落に見えた」と記している。

また、追想記は次のように伝えている。

三十一戸の入居者は、さまざまな問題解決のため、区の結成の必要性を感じ、結成の準備を重ねたようで、一週間に一度全員集合し、区の結成のための話し合いを重ね、様々な障害を克服し、昭和四十八年一月に中山区結成総会を開催している。当時の区民の意識は、結束が固く、「住みよい明るいふるさとづくり」をモットーに全員力を合わせたように思う。

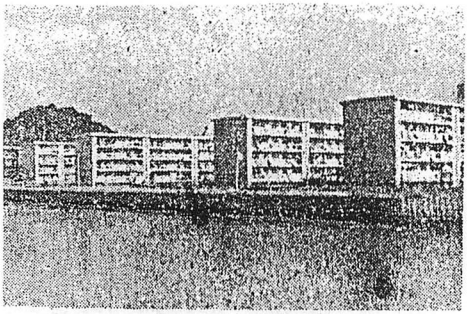
と追想している。

さらに『佐伯市史』は中山団地の造成について地元の協力を次のように記している。

中山団地の造成は、地元の協力のもとに進められ、天野教一上城区長が中心となり奔走し、用地買収は均一価格で行われている。公庫側も地元との契約による環境保全・整備に意を用い、汚水を農業用水路に流さないため、汚水処理施設を設け、処理した汚水は埋設した下水管を通して、堅田川に排出することにしている。また、用地内には現代生活にマッチ

するよう共用施設を建設し、団地構成のモデルになるよう配慮している。この団地の完成による児童増加をみこして、上堅田小学校の増築工事がすでに完成している。

〈モデル団地に変身した新女島の埋め立て地〉　新女島の中江川に沿って、市内ではめずらしい鉄筋四階の建物が並ぶモデル住宅が昭和四十七年度から年次計画で建設された。当時の様子を新聞報道では次のように伝えている。



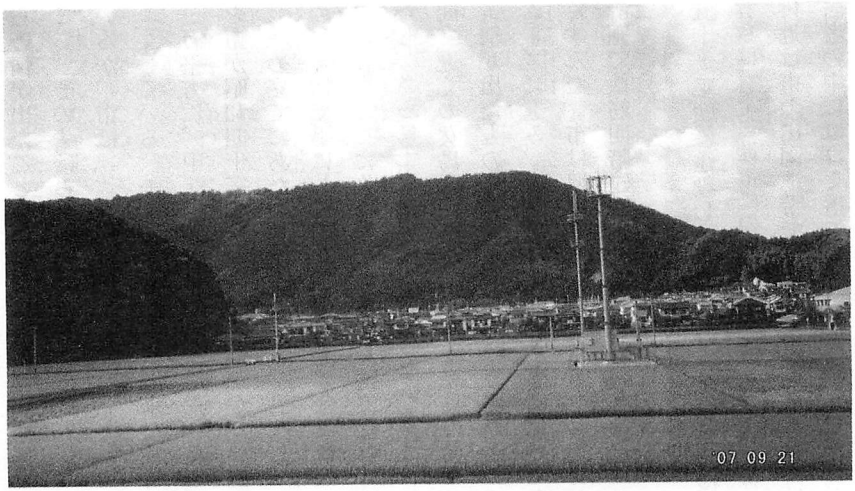
モデル団地に変身した新女島の埋立地
（『大分合同新聞』昭和52年2月12日版）

佐伯市新女島の中江川沿いに、鉄筋四階の建物が並ぶモデル住宅団地が実現した。五年ほど前までは「ハエが発生する、悪臭がひどい」と、付近の住民から苦情が出たこともある市指定のゴミ捨て場だったところ。そのすばらしい変身ぶりに市民もびっくりしているが、市は「〝一石二鳥〟のメリットあり」と、気をよくしている。モデル住宅団地が出来た場所は広さ約三万平方メートル。中江川の右岸に沿った荒れた地だったのを市が昭和四十三年度から五ヵ年がかりで埋め立てた。埋め立てにあたっては、効率的な手段として市指定のゴミ捨て場にして、一日六～七トン余りにのぼる市内のゴミをここに集めた。もちろん捨てたゴミは完全消毒し、さらに土をかぶせて支障のないようにした。その間、近くの女島区民から、ハエや悪臭の発生に対して苦情が出たものの、ゴミのおかげで埋め立て工事はスムーズに進み、事業費も普通の工事に比べてかなり安くすんだ。市は埋め立て地に昭和四十七年度から年次計画で鉄筋四階建ての市営住宅を続々建設している。

昭和五十一年度に建設した分を含めると総数六棟で、入居者数は百十二世帯にのぼる。各世帯とも3DKだが、この付近は市の田園地帯で、環境に恵まれており最近の入居者の中にはゴミ捨て場だったことも知らぬ人も

いるほど。市建設課では「ゴミ捨て場の跡といえば、気持ちが悪いかも知れないが、多量の覆土をした上、地盤が弱いため十八トンのコンクリート基礎柱を二十四トンにし、特殊工法によって住宅を建てた。基礎は安全で絶対心配ない」と、いっている。引き続き、鉄筋四階建てを昭和五十三年まであと二棟立てる計画だが、多くの入居者のために五十年度、鉄筋平屋立ての集会所一棟（七十八平方メートル）を敷地内に設けた。近く緑地公園も造り、環境をより整備する考え。（『大分合同新聞』昭和五十二年二月十二日版）。

〔注〕（1）『佐伯市現代二十年の歩み』（佐伯市平成七年）
（2）『中山区結成二〇周年記念』（中山区平成四年）
（3）（2）に同じ



大越川の堤防から見た中山団地（平成19年9月）